



Subaru

男声合唱団 ニュース№660

18. 8. 31

昂「第8回団内コンサート」開催！ 8月26日

□8月26日（日）13：30～16：00 「昂第8回団内コンサート」がねむかホールで開催されました。今年はソロ独唱でエントリーした19名（残念ながら病気のため1名出演を見送られました）、デュエット1組2名、トリオ(男声3重唱)1名(賛助2名)、そして3つのパート別演奏、最後に西應静さん、森二三さんのピアノ独奏があり、団員の参加者は全35名+特別参加1名（千秋教室生徒）でした。また猛暑の中を、テナーのパートレッスンや「中村教室」で声楽指導いただいている中村聖保先生、またお客様のジェーブシカの乾さんにも熱心に聴いていただきました。



□ソフトな語り口の小西さんの名司会で1部が始まりました。今年も「開会の挨拶」を指揮者の本並先生にお願いしました。「会のはじまり」に掛けて「昂のはじまり」について、昂を立ち上げて18年、現在40名の男声合唱団の存在の大きさ・貴重さについて、具体的に説明され、また音楽のはじまり、歴史にも触れ、「合唱」で大事なものは「声」とともに、「中身をどう表現するか？」が大事。「声を磨く練習」とともに「ことばの中身を表現すること」の追求。指揮者としての私は、皆さんのいい声といい表現を伸ばす努力をしたい。皆さんも努力を！」と、団員に熱いメッセージが語されました。



□最初に、緊張を強いられるソロのメンバー達のために中村先生から、簡単なヴォイストレーニングをしていただきました。またオープニングの歓迎歌「音楽」（まど・みちお/詞 木下牧子/曲）を「昂の皆さんのお演奏に音楽の神が舞い降りますように」と披露していただきました。

□トップバッターに大橋一雄さんが、「アベエ・マリア」(マスカーニ詩・曲)を「fa(ファ)の音をファルセットでなく自分の声帯で歌います」と「司会文」で説明し、高音での歌唱に挑戦されました。

□バリトンリーダーの榎本勲夫さんが、テナー山本宏司さん、バス乾正明さんの「賛助」を得て「秋ふたたび」（ロシア民謡 詩：アブジェンコ 訳詞：白樺 曲：バルツハラジエ）を、見事な男声トリオで歌い上げられました。今年の大坂うたごえ合唱発表会「小編成の部」に出演したら推薦確実な歌唱力、今後に期待しましょう。





□続いて日本歌曲の名曲の数々が、昴のベテラン歌手・うたごえの実力者のみなさんによって歌われました。吉田雄三さんが「北上夜曲」を、吉岡 敬さんが「初恋」を、立川孝信さんが「津軽平野」を。どの曲も「味のある」「自分の持ち歌」として仕上げて歌っておられることが理解できる曲として聴かせていただきました。



□昴の長老三谷 卓さんが今年も元気に、「My Way(マイ・ウエイ)」を歌われました。「長い人生の中には悲しいこともあった。苦しいこともいっぱいあった。しかし私の人生には歌があった。歌の中で素晴らしい詩やメロディとたくさん出合った。これから私の人生にこれらの財産を生かして私は生きていきたい。私たち昴の人生そのものです。“My Way”」と。

□引き続き、千秋教室のレッスン生が日頃のレッスンの成果を披露しました。

川妻成美さんが「老いた伍長」（詩/ベランジェ 訳/小野光子 曲/ダルダルコイシスキ）を歌い手の前にいる仲間に語りかけるように、役者が台詞を言うように、情感豊かに歌いました。

寺脇伸育さんは「お六娘（おろくむすめ）」（詩/林 柳波 曲/橋本国彦）を、軽妙な日本歌謡・淨瑠璃風の曲想に観客は聴き入りました。

向井勝弘さんが「恋する兵士」（詩/アニメルロ・カリファーノ 曲/エンニコ・

カンニオ）情熱的にカンツオーネを熱唱しました。吉川勝彦さんがドイツ歌曲の代表作・シューベルトの「冬の旅」より「菩提樹 Der Lindenbaum」を、土井一正さんが「疑惑」詩・曲/グリンカをロシア語（原語）でうたいました。



□1部の最後に、伊藤 知さんが「燃える心を」（オペラ「椿姫」第2幕より 曲/ヴェルディ）をテノールの迫力満点、情感豊かな声量で熱唱されました。



□休憩をはさんで、第2部が川妻さんの司会で始まりました。

乾正明さんが無伴奏で「淀川三十石舟唄(ジェ-ヴシカバージョン)」を独唱されました。京の伏見から大坂八軒家までの行程を歌いながら、解説も入れ、まるでその船に乗り込んで淀川を下っていく情景を思い浮かべながら「舟唄」に聴き入りました。



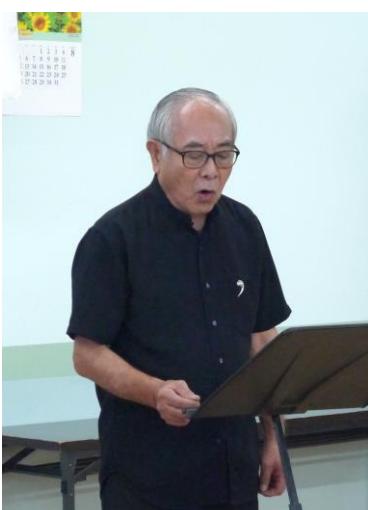
□仲谷増広・中谷清一さんがデュエットで、今年は「ともしひ」(ロシア民謡)を披露されました。普段からよく歌われているようで、高音部と低音部が響き合って、ロシア民謡の雰囲気が十分出た曲となりました。

□引き続き、「昴」の「ベテラン・ソリスト」の熱演が続きました。

三村千晴さんが、黒人靈歌「深き河」を、若園達雄さんが「落葉松」を歌われました。

「深き河」「落葉松」は誰でもよく知っている曲だけに、ソロで歌う難しさをクリアーされた味のある歌唱となりました。

奥村克美さんは今年は「晚秋」(詩/立原道造 曲/石若雅弥)に挑戦されました。新進気鋭の作曲家の曲は歌い手にとって魅力あることでしょう。



□小林 誠さんが「糸」（中島みゆき/詩・曲）を歌いました。多忙な仕事のため、昴休団中の彼が、この団内コンサートに参加してくれました。やはり何人分ものバスパートの声量の持ち主であり、心を込めた歌い方は健在です。



□大畠成美さんはトスティのさらば（Addio）を、山本宏司さんがG・Martiniの「愛のよろこびは（Piacer d' amor）」を熱演されました。



□ソロのトリに、千秋昌弘さんが、自作の「私は歌う 愛を信じて」（詩/千秋昌弘 曲/森二三）を歌われました。「今年3月、歌うことに行き詰まり悩んでいた時に、自分の中に在る思いを一気に書き上げた。私にとっての初めての作詞。森二三先生に作曲していただいた。彼女にとっても初めての作曲。大事に歌つていきたい歌曲にしたい」と。



□ソロの演奏のあと、各パートのパート演奏が続きました。トップテナー「夜の歌」（詩：坂田寛夫 曲：佐々木伸尚）、セカンドテナー「小さな木の実」（詩：海野洋司 曲：ビゼー）、バリトン・バス合同「ヒロシマ」（曲：ムスタキ 編曲：森二三）が演奏されました

今年も昨年に引き続き「パートレッスンの充実化」が昴の課題の一つになっていますが、毎月のパートレッスンを昴のレッスンの基本活動として位置付け、出席に努力してきました。短い練習時間の中でも、各パートともそれぞれのパートの特徴を生かし、よくまとまった演奏の力量を發揮した発表となりました。



□プログラムの最後に、2人の専属ピアニスト、西應靜先生にショパンの「子犬のワルツ」を、森二三先生にリストの「ポロネーズ 省略版」を演奏していただきました。リハーサルを含めて、出場メンバー全員の伴奏にお付き合いいただいた上に、見事な演奏に聴衆は大きな拍手で応えていました。



□「お客様の感想」を何人かの方からいただきました。

- ・「大変難しい曲を、それぞれ皆さん目標をもって取り組まれて、素晴らしい演奏をされた。パート別の演奏が今年は昨年より格段の上達をされている。」
- ・中村先生からは「毎年出演されておられる方は非常に上手になっておられる。まだ出演されていない方も是非出られては。個性的な声を出すことも可能だし、いろんな角度から練習する、それが可能です。合唱とは違う楽しみがあることでしょう」と。
- ・病気のため退団し、千秋教室は頑張って通っておられる土井さんから、「団内コンサートに出演することが闘病での生活でプラスになっていること。帰復にむけて生活していきたい。」

□「閉会の挨拶」が伊藤副指揮者からありました。

「今年は8回目の団内コンサート。これまでで1番充実した内容の団内コンサートになったと思います。一人一人の皆さんが1年かけて準備して、その基礎固めに努力された結果です。それぞれの課題がまた見つかったことでしょう。その課題を先生とともに改善し、良くしていくこともしてください。この団内コンサートは昇の合唱団としてのうたう力を確実にアップさせていただいている先生方にお礼申し述べます。また声楽レッスンを受けたいという団員のかたは相談してください。最後に、団内コンサートにそいだ力を今後の毎回の昇定例レッスンに傾けてほしい。」

また本並先生から、「新しい目標をもって、それを実現しようという気持ちが、気持ちを新たにし、健康に気をつける努力の源になります。藤後名誉団長を見習って、新しい目標の実現に向かって頑張りましょう」と結ばれました。